

30周年記念講演

# 「地域が変える21世紀の社会」

家族・子ども・教育・介護を住民の  
視点から考えてみましょうー



講師 広島経済大学  
助教授 小川 富之

## はじめに・東京ディズニーランドと法の支配

皆さんは、東京ディズニーランドに行かれたことがありますか？

日本の他リゾートやテーマパークは閉鎖されたり、経営状態が悪くなったりしているところがたくさんありますが、東京ディズニーランドは、相変わらずとても人気があっていつもたくさんの方が訪れています。どうしてなのでしょう？

この問題を考えることは、「明るく住みよい皆の街づくり！」を考える上で、大変参考になりますよ。

## 21世紀、家族・子どもはどうなるの？

- ・スーパー・チャイルドの誕生
- ・結婚する人はいなくなるの？
- ・男と女はどう違うの？
- ・老親扶養と相続問題 など

## 教育は家庭と地域の責任で！

- ・読み書きや単純な計算のできない子どもが大量発生してしまうかもしれない
- ・少年犯罪と自殺率が急増する
- ・21世紀の日本を滅亡から救うのは、家庭と地域の連携から

## おわりにー明るい少子・高齢社会

- ・高齢社会ではなく長寿社会
- ・少子化社会ではなくさまざまな家族形態の出現

21世紀の日本は、本当は明るい展望が持てると思います。地域の連携こそが、それを可能にします。21世紀の日本を、閑散とした寂しいリゾート・テーマパークにするか、東京ディズニーランドのような楽しい夢の国にするかは、地域住民が共に手を取り合っているかどうかにかかっています。

ただ今、ご紹介を頂きました広島経済大学の小川と申します。しばらく前ですけど、畑賀地区社会福祉協議会会長の中島様からご連絡を頂きまして、30周年の記念式典を開催されるということで、その式典で少し話をしてくれないかというようなご依頼を受けました。お話をうかがった時、まずこういう地域で、30周年の式典を大々的にやられるという事は非常に珍しいと、私は、思いました。この地域の活動にとっても興味がわきましたので、「ぜひ引き受けさせて頂きたい」と、むしろこちらからお願いして、押しかけたような次第です。

この度は、本当に、30周年おめでとうございます。私のような者がどんな話ができるのかということをおもったのですが、一応全体的なテーマとして「21世紀・共に手を取りあって」ということで開催されるということで、私も「地域が変える21世紀の社会 家族、子ども、教育、介護を地域住民の視点から考えて見ましょう」というテーマにさせていただくことにいたしました。この目的は、私がここでお話をして皆さんに考えて頂くのではなくて、私も含めて一緒に考えていきたいなということで、こういうテーマにさせて頂きました。先ほどから、式典が始まってずっと拝見させて頂きまして、私自身がすでに非常に勉強させて頂きました。そういう意味では、非常に感謝いたしております。21世紀、共に手を取りあって活動していってほしい地域が、まさに、ここだな、ということを実感として感じました。私は研究者であるテーマが与えられて、どういうふうに問題を解決したらいいかというのを考えるのが、一つの仕事なのですが、そういった意味では、実態として、実体験として、こういう地域の活動の素晴らしさというのを見せて頂いて非常にありがたいと思っています。

それから、待っている間に、金子広島市議員さんと少しお話をする機会がありまして、この地域は広島市と合併をした社会福祉協議会がスタートして、48年に合併をしたという事ですけど、合併以来ずっと地域が非常に特色を持って活動をしているというのをうかがいました。運動会とか、いろいろな事業も地域でやっているという事です。今、地方分権推進ということが盛んに声高に叫ばれていますが、新聞とかテレビの報道を見ていても、実はなかなか進んでいません。この近辺でも、議論紛糾しているところがたくさんございます。今日、こちらに来させて頂いて拝見している限りでは、この畑賀地区の活動は、素晴らしい事例ではないかなということを思いました。小泉純一郎内閣総理大臣も、また、広島県であれば藤田雄山県知事さんも、ぜひこちらに来られて、この地区の活動をご覧になるといいのではないかと思います。合併された後、地域が特色を失うのではないかなという議論が一つありますが、そういう事はないのだという一つの非常に大きな実例ではないかなと思います。地方分権推進担当者も、ぜひこちらに少し研修に来て頂いたらいいのではないかな、ということをおもいました。どなたか連絡をして差し上げれば、非常に喜ばれるのではないかな、と思います。

実は、今日、来るのに非常にドキドキしていました。私は福祉関係に非常に関心がありまして、海田にある広島福祉専門学校で法律の講義をさせて頂いているのですが、今

日もお見えですが、ひかり幼稚園理事長の柳父先生には、そちらでいろいろな形で指導して頂いていますが、先日、「先生今度うちの方に来られるらしいですけど、皆さん楽しみにしておられますよ」ということを伺いました。そんな楽しみされていると困ったなということを思っていました。こういうふうにたくさんお集まり頂いて、関係の皆さんへの地域での、いろいろな広報活動も徹底しているのだなという事も感心しました。

### はじめに 東京ディズニーランドと法の支配

皆さんは、東京ディズニーランドに行かれたことがおありですか？  
日本の他リゾートやテーマパークは閉鎖されたり、経営状態が悪くなったりしているところがたくさんありますが、東京ディズニーランドは、相変わらずとても人気があって、いつもたくさんの方が訪れています。  
どうしてなのでしょう？  
この問題を考えることは、「明るく住みよいみんなの街づくり！」を考える上で、大変参考になりますよ。

今日のテーマですが、「地域が変える21世紀の社会」で、まずレジュメのはじめに、「東京ディズニーランドと法の支配」ということを書きました。おそらく、皆さんこれをご覧になって、なぜ「東京ディズニーランド」なのかなということをお考えではないかと思うのです。実は、「広島県安全まちづくり懇談会」というのがありまして、6月からスタートしました。それがスタートする前に、犯罪減らしのアイデアを市民から募って、いろいろなアイデアが県警の方に寄せられました。そういったことも含めて、「広島県安全まちづくり懇談会」というのを始めました。座長は藤田雄山広島県知事で、県警の本部長さんを始め、教育長、広島県の各界の主だった方々、約二十数名で組織されています。私がおそらく一番若い委員ではないかなと思うのですが、そこで初会合があったときに、広島県は非常に犯罪が増えている、ということでした。これは増加率、凶悪化も含めて忌々しき事態です。何とかしなければいけないということで、こういった懇談会を立ち上げて4～5年のうちに条例をつくり、県民会議にまで発展させたいということでした。はじめて顔合わせの会合があった時に、それぞれ委員の先生方が、いろいろなお話をされました。そこで私は、「東京ディズニーランド」の話をご出席の皆さんにお話ししたのです。「東京ディズニーランド」の話を始めると、皆さん場所を間違えているのではないかという感じでいらっしゃいましたが、最後まで話を聞いて頂くとなると、なるほどなと言って頂いた方もおられます。

昨年、「東京ディズニーランド」に子どもを連れて行きました。とてもきれいで驚きました。私の子どもは、今、小学校6年生と中学校2年生なのですが、非常に喜びました。去年なので、当時は小学校5年生と中学校1年生だったのですがね。2日間続けて行きまして、子どもはもう1日泊まろうと言っていました。実は親はくたくたにくた

びれ果ててしまいました。それほど「東京ディズニーランド」というのは、子どもたちにとってすばらしいレジャー施設です。私は、法律家なので「東京ディズニーランド」に行き、何を見てきたかという、実は、1日中ずっと地面を見て歩いていたのです。下ばかり見て歩いていると、長男が「お父さん何をしているんだ」というので、「地面を見て歩いているのだ」と答えました。「なんとか(?) スブラッシュには乗らないのか?」と言うので、「そんなことはどうでもいい、一日、今日は東京ディズニーランドの地面を見て歩きたいのだ」と言って2日ほど歩いたのです。「東京ディズニーランド」では一日に2回パレードがあるのですが、2日目に夜のパレードに行きました。パレードに行き、これも驚きました。私は「東京ディズニーランド」に行き、二つほど非常に驚きをもって帰りました。そういう話を広島防犯懇談会の席上で皆さんにお話ししたのです。

皆さん、よくご存知だと思いますが、「東京ディズニーランド」は、いつ行っても超満員です。行ったら必ず、入場券を買う時に並びます。そして中に入っても、アトラクションを利用しようと思うと、なかなか大変で、乗れないくらい人が多いです。これはオープンした時から多くて、ずっと人がたくさん来ている状態が続いています。ただ、ご承知のように、日本全国の状況を見ても、他の多くのレジャー施設やテーマパークは、お客さんが来なくて、中には閉鎖したり莫大な資本をかけたにも関わらず、うまくいっていないところがたくさんあります。それにもかかわらず「東京ディズニーランド」にはどうしてこんなに人がたくさんいるのかなということで、「東京ディズニーランドと法の支配」というお話をいたします。ポイントは二つなのです。

「東京ディズニーランド」にはどうしてたくさん人が集まって、一方で日本全国にいろんなレジャー施設やテーマパークがあるけれど、うまくいかないところがたくさん出てくるのか、ということについて考えると、ポイントは二つだけだと私は思うのです。

一つは、「東京ディズニーランド」に行くと、ゴミが落ちていないのです。それで地面をずっと見て歩いていたのです。皆さんがもし「東京ディズニーランド」に行く機会がありましたら、子どもを乗り物に乗せておいて、地面を見て歩いて下さい。結構面白いのです。ゴミが落ちていない、これが一つのポイントです。

もう一つは「東京ディズニーランド」の職員は、非常に冷たいです。お客さんの扱いを、そんなやり方でやっているのかなと思うくらい、非常に冷たいのです。それはパレードを見る時に感じました。ゴミが落ちていないという事と、職員が冷たいという、この二つのポイントで「東京ディズニーランド」は、これまでずっと大盛況を続けているのです。

子どもも含めて「東京ディズニーランド」に行く人たちは、ゴミを捨てないわけではないのです。他のテーマパークに行くのと同じ人間が行っているのです、実はゴミは捨てるのです。私も、「プーさんのポップコーン」というちょっと甘いのを買って食べていたら、人にぶつかって、ちょっと落としてしまったのです。それでポップコーンが地面

に散らばりました。私たち家族が一生懸命に拾っていたら、並んでいたの後ろから人に押されて、全部拾いきらないうちに列が前に進んでいってしまいました。押されているのでどうしようもないのです。いけないことしたなと思っていて、ぐるっとまわって帰って来ると、ポップコーンはないんです。どうしてかなと思っていて、実は、きちんと片付けているのです。「東京ディズニーランド」はゴミを捨てる人もたくさんいますし、ゴミを落としたりすることもありますし、今のように人とぶつかってちょっとした事故でゴミが散らばったりするようなこともあります。「東京ディズニーランド」も他のところと同じようにゴミが散らばるのですが、他のテーマパークと違ってゴミがすぐなくなるのです。これが非常に大きな特色です。「東京ディズニーランド」はおそらくゴミを回収するのに一番力を入れているのだらうと思います。レジャー施設が面白いかどうかというよりも「東京ディズニーランド」は、ゴミを捨てるということに力を入れているのです。

その理由を考えました。少しでもゴミが落ちていたら、ゴミは増えます。かなりゴミが散らばっていると、ゴミを捨ててはいけないのではないか、という気持ちが、片隅にありながら、まあ、いいかといって人はゴミを置いていってしまうのです。そうすると収集がつかなくなるのです。「東京ディズニーランド」は、ゴミを捨てるににくい環境を作っているのです。ゴミを捨てようという気持ちを、非常に抑制させる環境作りをしているのです。コカ・コーラを飲んで、そのままポンと置いていたりすると、二つ目を置いて、三つ目を置いて、五つぐらいになりますと、六つ目は平気で置けるのです。でも何も置いていないと、人は最初の空き缶一つというのは、なかなか置きにくいのです。「東京ディズニーランド」、これは素晴らしいことだなと思います。

二番目の「東京ディズニーランド」の職員は冷たいというのは、パレードが始まる前に実感しました。私は初めてだったからよくわからなかったのですが、夕方になると皆がビニールシートを下に敷いているのです。何をやっているのですかと聞きますと、今からパレードが始まるから場所を取っているのだ、というのです。場所をとらないといけないのか、と思って、私も場所を取りました。でもちょっと手遅れで、かなり後ろの方でした。それからしばらくして、パレードが始まる少し前に「東京ディズニーランド」の職員の方が回ってこられまして、ちゃんとパレードをする通路が確保されているかどうか確認をするんです。パレードを見る人がたくさんいるので、非常用通路というのを紐を張って確保してあるわけです。そういう、安全が確保されているかどうか、というのを見回っているようでした。

私の斜め前に座っていたお客さんで、小さな赤ん坊を連れた若い女性の方が、乳母車を使っていました。乳母車を使っているのだから、その乳母車を自分が陣取ったその横に立てかけて置いていました。ただそこには、「ここは非常用通路ですから、物を置かないで下さい」と書いてあったのです。そこに乳母車を置いていました。小さな乳母車一個だけでした。その方が、「東京ディズニーランド」の職員の方が来た時に、「子どもが小

さいので乳母車をそこに置いていてもいいですか」と聞いたら、「東京ディズニーランド」の方は、「いいですよ」とおっしゃっていました。そうなのかな、と思って見ていました。しばらくたつと、パレードが始まる直前に、今度はきちんとしたスーツを着た、監督的立場にある「東京ディズニーランド」の職員の方だと思うのですが、この方が、回って来ました。その方が回って来て、その乳母車を指摘して、「この乳母車はどけて下さい」とおっしゃったのです。そうすると、その若い女性の方は、「さっき職員の方に聞いたら置いてもいいと言いましたよ」と答えました。後ろから見ていても、視線の妨げにもなりませんし、全然じゃまになりません。通路の確保も出来ています。「何かあっても十分逃げれるだけの場所はあるし、そんなにじゃまになっていないからいいではないですか」と言って訴えました。そうすると、その「東京ディズニーランド」の監督的立場にあるその職員の方は、何と言ったかという、「いえ、直ちにどけてくれ、ここに乳母車を置いて後ろの人のじゃまになるかどうかという問題ではなく、通路が確保出来ているかという問題でもなく、ここは物を置いてはいけないところだから、どけてくれ」と厳しく言うのです。このお母さんは怒りました。「すぐにどけるか、この乳母車を持って、どこか別の場所に移動してくれ」と言うのです。私も、後ろで聞いていて、ひどいことを言うものだな、と驚きました。その方は、怒って帰られたようでした。

実は、「東京ディズニーランド」としては、今のお母さんが、どうして乳母車を置いてはいけないのか、ということが解らない限り、リピーターとしては来てもらいたくないのです。乳母車一つ置きますと、次に誰かが鞆を持っていて、鞆を横に置くかもしれません。そうすると、三番目の人が、自分の物もじゃまになるので、二つ置いているから、三つ目の所に置くかもしれません。一つ目はじゃまになりませんし、通路も確保されています、けれど、四つ、五つになりますと、後ろの人の妨げにもなりますし、何か緊急事態があった時に逃げれなくなってしまいます。この時、三つ目、四つ目の鞆をどけてくれと言った時に、その人から、「一番最初の乳母車は、置かせているではないか」と言われた時に、返答が出来ないのでした。

「東京ディズニーランド」というところは、夢を売る場所です。私達が「東京ディズニーランド」に行った時に、帰る時に、入り口付近にもしゴミが散乱していたら、どんなにきれいなお城とか、アトラクションとかあっても、乗り物がどれだけおもしろかろうと、幻滅してしまいます。夢の国ではなくなるのです。そして乳母車一つ置かせたために、二つ、三つ、四つとなった時には、「ここには物を置かないで下さい」という規則・ルールの意味が全くなくなるのです。これが「法の支配」です。

「法の支配」というのは、ルールを守りやすい環境にすることなのです。言い換えると、ルールを破りにくい環境にすることです。皆で決めたことを、きちんと守りやすい環境にする。ゴミを捨ててはいけないということは、皆知っています。けれど捨てるのです。なぜ捨てるのかというと、ゴミを捨てることに対する抵抗感が薄らいでくるからです。ゴミが全くなければ、なかなか捨てるににくいのです。そしてルールは、一人が破って、

二人破って、三人破って、十人ぐらい破りますと、十一人目というのは、ほとんど、ルールを守らないといけないという意識がなくなるのです。一番大切なのは、「東京ディズニーランド」は夢を売る場所なので、「東京ディズニーランド」に来た人が楽しむのはもちろんなのですが、帰る時に素晴らしい場所だった、この次も、もう一度来てみたい、そういう気持ちで帰らないと、リピーターは来ないのです。これは、何が一番大事かという、ルールをルールとして守らせる、という事です。これは私達の家庭においてもそうですし、地域においてもそうですし、国全体でもそうです。

今日のお話で大切なのは、「地域の皆さんと手を取り合って」、ルールをルールとして守らせるような社会を地域につくれるか、ということです。つまり、一つ、二つ、ゴミが落ちていた時に、そのゴミを、地域からなくすことが出来るかどうか、ということです。一人、二人、ルールを破っている時に、きちんと、それはいけない事だよ、と言ってやめさせる、ルールをきちんと守らせることが出来るかどうかということは、地域の皆さんの役割なのです。私達一人一人の問題なのです。子どもが公園を利用している時に、その辺にゴミを散らかして帰っている時に、それに気がつくのは「東京ディズニーランド」は職員がいますけれど、地域の場合は、私達一人一人なのです。私達一人一人が、ゴミをそこに捨ててはだめだよ、持って帰らなければだめだよ、と注意したり、ゴミ箱のまわりに散乱している時にそれをきちんと、ゴミ箱に入れることが出来るかどうかというのは、私達一人一人の問題なのです。「東京ディズニーランド」のように素晴らしい環境が出来るかどうかというのは、最終的には、私達一人一人みんなが、ルールを守りやすい環境、つまり、ルールを破った時にルールを破ったということを一番最初の小さな芽の時につむ事が出来るかどうかということです。そうしないと、日本全体が、採算が成り立たなくなったテーマパーク、大きな資本を投下して作ったテーマパークのようになってしまうのです。また、私達の一人一人が、ちょっとしたことに気をつければ、「東京ディズニーランド」のように、いつ行っても超満員で、帰る時には素晴らしい夢を持ってもう一回行ってみようというような場所にできるのではないかな、という事を考えたのです。

今日のテーマの「はじめに」として、書かせて頂いたのですが、こういう話を防犯協会の会合の時にしました。それを頭にいれておいて頂いて、お話を聞いて下さい。私は、実は、家族法が専門なのです。続いて、自分の専門との関係で少しお話しします。

## 21世紀、家族・子どもはどうなるの？

### スーパー・チャイルドの誕生

皆様方に今日は資料をお配りしているのですが、その資料を使って「家族、教育、介護を考えよう」というテーマで、少し家族の事について考えて頂きたいと思います。皆さんのレジュメの中に、新聞で連載しました記事を紹介しています。時々シリーズでエッセーを書かせて頂いているのですが、1998年には家族の話を15回連載させて頂きま

した。明治から現在までの家族の話をしたのです。なかなか好評で、けっこう、いろいろな人に読んで頂いたみたいです。内容について、本当か、と言って文句も言われました。明治から現在の事までを書きますと、「小川さん、これはおかしいのではないか」と指摘を受けた時に、それは歴史的事実ですから、そういう指摘をされますと、確かにおかしいという事も出てくるのです。それは間違っていたかもしれませんが、もうちょっと勉強しましょうというようなお答えをしました。今度は、21世紀からの家族について連載してくれと言われたので、この時には非常に気楽に書きました。大体どういうことが書かれているかといいますと、2350年から2500年ぐらいの家族の事を、書いているのです。これは前回は上回って、いろいろな人から批判を受けました。「小川さんは大法螺吹きだ」、「こんなばかな話があるか」という批判です。だけど非常に気楽です。これは2350年とか2500年の話なので、私はこういうふうになると思っているので、そうなるかどうかは2350年とか2500年になってみなければわからないので、もしその時に間違っていたら、いくらでも謝る、その時に指摘して下さいと返答をしたのです。かなり先の話なのですが、未来は現在からつながっていますので、私達の現在の家族、将来の家族がどういう風な方向に行っているのかということ、その資料を使って話をしたいと思います。

21世紀の家族を考えるということで、いろいろなことを考えてみたのです。どうしてこんな事を考える契機になったのかということは、第1回目のエッセーに書いてあります。先ほどご紹介頂いた時に名前が出ましたが、私がいろいろお手伝いをしている、「アジア太平洋法律家協会」という団体があります。2年に1回大会を開いていまして、来年は東京で開催されます。アジア太平洋地域の最高裁判所の長官会議と弁護士会の会長会議を併催いたします。けっこう大きなイベントなのですが、たまたまその会の家族部会の会長代行をしていますので、たいへんなのです。そういった会議でいろいろな話が出てきます。

もう一つの私のかかわっている団体で「世界会議 家族法と子どもの人権」、これは4年に1回世界大会をしているのですが、そういう国際的な団体で、家族の問題を考えてきますと、普段私達が思ってもみなかったような話が、たくさん出てくるのです。一番最初のページの一番下の方に書いてあるのですが、「世界会議 家族法と子どもの人権」というのを組織して、第1回の大会が1993年、シドニーで開催されました。2回目1997年、これはアメリカで開催されました。みなさんがご存知のアメリカの前の大統領クリントンさんご自身をお招きして、ごあいさつを頂こうかと最初は考えていました。しかし、彼は、家族の問題で非常に大きなスキャンダルを抱えていらっしやいましたので、ちょっとふさわしくないということになりました。そこで、ヒラリー・クリントンさんは奥さんですが、子どもの問題を熱心にやっぴらっしやる弁護士さんなので、大会の議長をお願いして、アメリカのサンフランシスコで1997年に開催しました。3回目が昨年、イギリスのバースというところで開催されました。4回目は、恐らく広



島になるのではないのかということを考えています。

1回目の準備でみんなで集まって話をする時に、世界中で一番大きな家族の問題は、「エクスナブチュアル・ドメスティック・リレーションシップ」というのがありますが、これを何とかしないといけないと、1980年代後半から90年当時には問題にしていました。私は、はじめ、何のことかなと思いました。直訳すると「婚姻外の家族関係」。結婚していなかったらどうやって家族ができるのかな、と思いましたら、みなさんご承知のように、その後日本でも「事実婚」というのがかなり定着してきましたが、その問題だったんです。その後、1993年のシドニー大会の頃になりますと、「生殖補助医療と子どもの人権」というのが大きな問題として浮上してきました。私が、たまたま出たセッションの全体会議でパネラーとして報告したのですが、その時のテーマが、「アン・マリッドカップル・インクルーディング、ホモセクシュアル・リレーションシップ」というのでした。日本語だと、「ホモセクシュアルの関係も含めて結婚していない人々」というテーマで、参加の皆さんに日本の状況をお話をしました。4人のパネラーが出て、私はその中の一人で、話をさせて頂きました。

会議が始まる前日に、司会役の先生に私たち4人集められまして、「明日はホモセクシュアルの人達が子どもを生んだらどうするか」ということを中心に議論してもらいたい、と言うのです。これには驚きました。翌日には、会場の壇上で多くの人々の前で話さなければいけないわけですから、聞くのは今日中に聞いておかなければいけないと思って、恥を忍んで「ホモセクシュアルといたら男性同士とか女性同士の話ですよ」とたずねました。そうすると、「そうだよ」と司会の先生が言いました。日本では「男同士で子どもを作った」という話を、まだ聞いた事がないのだけれど」と言ったら、「小川さん遅れているよ、そんなのヨーロッパではたくさん産んでいる」と言うのです。男同士で子どもを作った、女同士で子どもを作った時に、どちらがお父さんで、どちらがお母さんかというのは非常に重大な問題で、そもそも、どうやって子どもを作るのか、子どもを作ることを認めていいのかどうか、というのは非常に大きな問題で、こういったことが実際に起こっているというのです。日本は性教育が遅れているのか、私が遅れているのか、どうもよくわからないのだけれど、「ちょっと、男同士でどうやって作るのか教えてくださいませんか」と質問したら、それは生殖補助医療なのです。これは今では日本でも常識になっています。男性同士で、ホモセクシュアルのカップルが生活をします。生殖補助医療というのは不妊のカップルが子どもが欲しいという時に行われますが、日本ではだいたい10%から15%ぐらい、10組のうち1~2組のカップルは子どもが欲しくてもできません。アメリカだと2割を超えているそうです。不妊、妊娠しない、欲しくても子どもができないのです。そういう人達は、養子をもろうか生殖補助医療といって人工授精とかいろいろな事をやるわけです。生殖補助医療で、人工授精と違って、男性側に問題がある場合の治療方法というのはかなり前から実施されています。今では女性側に問題がある場合にも、卵子を取り出して、以前は試験管ベビーと言われました

が、本当はシャーレ なのですが、シャーレ の上で受精をさせまして、それを女性の体の中に戻して妊娠させて出産させるという方法が取られています。自分で子どもを産めない女性も子どもを産めるようになっていきます。代理母と言って、代わりに子どもを産んでもらうわけです。日本人のカップルも何組かいるのですが、極端な例でいうと、精子は夫の精子ではなく、卵子も妻の卵子ではなく、産むのも妻以外の女性が産んだ子どもを、自分の子どもとして育てるということが実際に行われているのです。日本ではまだ実施されたと言う例は正式には報告されていません。しかし、日本では実施できないといっても、どうしても子どもが欲しい人は、お百度を踏んだりするわけですから、何としても、仮に正式には認められなくても、出来れば生殖補助医療を実施してもらいたいわけです。お百度を踏むというのは、かなりの努力と体力が必要なのですが、子どもができるかどうかという可能性は大変低いわけです。誰にも見られてはいけなし、朝早くやらなければいけないのです。今、そんなことをしなくても、サンフランシスコに行けば、生殖補助医療が受けられますからほぼ100%子どもをつくることができます。自分が産めなかったら産んでくれる女性を探してくれて、その人に代わりに産んでもらったりすることも出来るわけです。そうすると、父親との血縁的繋がりもない、母親との繋がりもない、産むのも別の女性という方法で子どもをつくるということが、実際に行われているのです。男性と女性が結婚している場合、生殖補助医療として正式に行われているのです。こうしたクリニックに男性同士のカップルが行くわけです。「私達も、努力したけれども子どもができない。何とかしてほしい」というのです。普通できないのですよ。実は、後でお話しますけれど、今はできるようになっているのですけれどね。ホモセクシュアルのカップルが生殖補助医療を受けたいといって、クリニックに行った時に、お医者さんが、「あなた達は男同士のカップルだから家族を作って幸せになる権利はないのだよ」、「家族を作って幸せになる権利というのは男性と女性の組み合わせしかないのだよ」とは主張できなくなっているのです。家族形成権という言葉を使いますけれど、ホモセクシュアルの人達にも、家族を形成して幸せになる権利が、男女のカップルと同じようにあるのだ、ということなんです。

ただその時に問題になるのは、生まれてくる子どもと親との関係です。「うちは、お父さんもお母さんも女なんだよ」、「うちは二人とも男なのだよ」、「へー珍しいね、うちは、なぜか知らないけれど、お父さんは男で、お母さんは女だよ」という社会でいいのかどうか、という問題です。これが最近、非常に大きなトピックとして、1993年以來、ずーっと議論されているテーマです。

皆さんに理解してもらいたいのは、ホモセクシュアルというのは好みの問題だということなのです。実は、私がそのセッションにパネラーとして出た時に、議長から怒られました。「小川さん、甘いものと辛いものと、どっちが好きですか。」「どっちかというと、私は御酒が好きだけれど甘い物も好きだ」というと、「わがままですね」と言われます。世の中には「甘いものは好きだけれど、辛い物はきらいだ」、「辛い物は好きだけ

れど、甘いものはきらいだ」という人もいます。その時に甘党の人が、「辛い物が好きというのはおかしいではないか、お前も甘い物を食べろ」と言えるかということです。ホモセクシュアルというのは、好みの問題なので、だいたい、小学校高学年ぐらいに、自分のことに気がつくのです。昔も今も同じだと思いますが、男性どうし学生の頃に集まると、「うちのクラスで誰がかわいいか?」「一番は松子ちゃん、二番は花子ちゃん」と男の子は話をするのです。女の子もしているのかどうか知りませんがね。その時に、「俺、三郎君がいい」と言うやつがいるのです。そうすると、「お前おかしいのではないかと」言われる訳です。その人は、本当に、みんなは花子ちゃんに注目しているのだけれど、自分はなぜか視線が三郎君に向かっているわけです。これは好みの問題で、小学校の高学年ぐらいで気がつくのです。みんなに、おかしいと、いわれるから、それから何も言わなくなるのです。これは病気でもなんでもなくて、辛いのが好きか、甘いのが好きか、と言う好みの問題で、たまたま男性は女性を好きな人が多いだけで、男性の中にも男性が好きだと言う人は、数は少ないけれどいるのです。これは、好き嫌いの問題なのです。好き嫌いは認めてあげましょう、ということです。自分は甘党だからと言って、辛党の人に、甘い物を食べろと、強制することができないのと同じです。こういう話なのです。

そうすると、その人達が幸せになる権利を、摘んでいいのか、という話です。その話の続きが私のお配りした資料の2ページを見て頂くと、「処女懐胎パート2」というタイトルで書いてあります。こういった問題は、1993年ぐらいから、考え始めていたのです。ちょっと内容を見て頂くと、「私達人間は男女の性関係によって子孫を残してきた。これまでの歴史の中で、処女懐胎でキリストを生んだとされる、聖母マリアが、唯一の例外だった。・・・」私達が、今日ここにあるのは、私達の祖先が、誰一人としてさぼらず、性関係を持っていてくれたおかげなのです。もし、仮に私のおじいちゃんが、「今日は面倒くさいからやめておこうか」と言っていたら、私は現在ここに存在していないのです。私達はそういう有性生殖によって、子孫を残すということをやってきました。ところが、今は、第二、第三の聖母マリアが、たくさん誕生しています。

今から7年前の話ですが、バッキンガムシアというところに住んでいる女性が、どんな男性とも関係を持ちたくないけれど、子どもが欲しいので処女懐胎で子どもを産みたいと言って、子どもを作ったという話が、報道されているのです。これは生殖補助医療です。人工授精の話です。実際に、そういうふうにして子どもを作れるようになっていきます。マリア様は困りますし、キリスト教会にとっては忌々しき事態なのです。キリスト教関係者は、こうした生殖補助医療には反対をしています。神への冒涇だということです。ただ、どうしても子どもが欲しい人にとっては、どういう方法であれ、子どもを作りたいという事になってきます。

さっきお話しましたが、私たちの10%から15%が不妊なのです。そして、人工授精の実施は、実は、1790年代なのです。江戸時代の話なのです。そういう頃から、人工授

精というのは、もう外国では行われていたのです。体外受精で子どもを産んだというのは、比較的最近で、1978年です。試験管ベビーと呼ばれました。現在はもう24~25歳になっておられます。ルイズ・ブラウンさんとおっしゃいます。この体外受精が行われるようになって、世界は一変しました。どういうふうに一変したかということ、その続きをあまり長くないので読んでみます。「...イギリスで体外受精で子どもが生まれた後、体外受精の実施は急増している。ほかの国々でも数百万人の体外受精ベビーが生まれると言われている。...」断っておきますけれど私の発言ではありません、アメリカの分子生物学者が言っているのですが、こういう予測をしています。ノーベル科学賞の候補にも上がるような非常に権威のある分子生物学者ですが、「2010年ごろには、子どもの欲しいカップルや夫婦は受精卵プールの中から、自分達の希望する特性を持った子どもを選んだりできる、同性愛者のカップルが、二人の遺伝的要素を持った子どもを出産することが可能になる」と言うのです。つまり、男性同士で、子どもが、作れるようになると言うのです。女性同士で、子どもが、作れるようになるのです。「2050年になりますと、生まれてくる子どもの将来の姿がわかっているだけではなくて、バーチャルで今から産もうと思う子どもの、10歳の時の姿が現れて、ちゃんと動くのです。20歳ぐらいになったらどうなるか、私ぐらいになったらどうなるか、といったことが、全部わかるのです。何歳ぐらいで死にますか、ということもわかるようになります。」さらに、「現在では不治の病とされている、エイズのような病気に、感染しない遺伝子を組み込んだ子どもができるようになります。」それまでに治療方法が見つかるかどうか、わかりませんが、もし見つからなかったとしても、ヒトゲノム計画で、私達の遺伝子は、もうほとんど解明されています。どういう遺伝子を持っていると、どういう病気になるか、どういう性格が現れるか、ということがわかるようになっているのです。「私のお父さんは、酒のみだったので、子どもは酒が嫌いなのを作って下さい」と言ったら、出来るようになるのです。そういう遺伝的要素を持った子どもが作れます。そしてそれだけではなくて、エイズになったら治らないけれど、かからないような、または、かかっても発病しないような遺伝子を持った子どもが、作れるようになるのです。風邪にかかりにくい子ども、癌にならない子どもが作れるようになるのです。これが「2350年ごろになると、そういうかたちで、遺伝子改良を重ねたジーンリッチと呼ばれる人達、実は、もうスタートしているのですが、それと、自然に普通の夫婦関係で生まれた子ども、ジーンナチュラルと、大きく二つに二極分化されるようになります。」どれぐらい差が出るかということ、「能力等において到底超えることのできないような差が出ます。」例えば走るのが速くて、美人で、頭が良い、という子どもを作って下さい、ということを繰り返していくと、「2350年ごろには、そういう改良を加えたジーンリッチといわれる人達と、普通に今まで通り私達がやっていたようなやり方で子どもを作った人達と二極分化されます。」わかりやすくいうと、現在の私達と、安佐動物園に行った時に正面にいる私達の仲間ぐらいの違いです。あの方たちと、私達の遺伝子というのは、内容的にはほ

とんど同じなのです。2350年ぐらいには、そのぐらい差が出るのです。生殖補助医療の技術開発で、このように人間の特性がコントロールできるようになりました。精子バンク、卵子バンクはすでに存在しています。精子バンクで、ノーベル賞を受賞したような科学者の精子を売って下さい、と言ったら、アメリカではすでに売ってくれます。ミスユニバースの卵子というのが、600万円ぐらいするらしいですが、インターネットで販売されています。オリンピックの、女子100mの金メダリストに頼んで、子どもを産んでもらうという事も、代理母で、実は、可能になっています。これは、もうすでに、スタートしているのです。2350年に予測されているような事態というのは、もう、実は、始まっているのです。ただ、2350年になった時に、こうなっているかどうかと言うのは、現在の私達にかかっているのです。こういうことの歯止めをかけるのか、それとも、歯止めをかけないで、そういう方向に、好き放題やっていいのか、人類の未来が私達にかかっているのです。

男と女はどう違うの？

お配りしている資料の1ページ目にもどって、サンフランシスコで、ヒラリー・クリントンさんに議長をやってもらった頃に、どんな話が出てきたかということ、会議の時に「トランス・セクシュアリティ」とみんな言うのです。「トランス・セクシュアリティ」とは、一体、何かなと思いました。この「トランス・セクシュアリティ」が、1997年でしたが、当時のアメリカで大きな問題となっていました。議論していてようやくわかりました。実は、性転換です。これもご承知のように、現在の日本でも性転換手術が行われるようになりました。だけど、私達の会議では、1997年に会議が開催される前から、一番大きなテーマとして議論していました。性転換というのは、実は病気なのです。これは資料の5ページ目を見て頂くと、「...ある朝目覚めたら自分が異性の体になっていたらどうしますか・・・」、つまり、男性の方が朝起きたら、あるべきものがなかった、トイレに行って、朝、用を足そうと思ったら、できなかったとしたら、どうしますか、という話です。そんなことは考えられない、と私達は思うのですが、実は、毎朝、こういう体験をされている方たちが、いらっしゃいます。これが性転換の話です。正確には資料の5ページ目の一番上の行に書いてありますが、性同一性障害と言うのです。これは、自分は女なのに、なぜか体が男だ、逆にいうと、自分は男なのに、体が女の体をしている、と悩んでいるわけです。これは病気なのです。

直す方法は二つあります。一つは、「あなたは男だと思っているかもしれないけれど、体を見たら女なのだから、勘違いなので、女なんだよ」と言って、「あっ、そうだったのか」と考え方を覚えてしまえば治るわけです。でもそうは思えない人がいるのです。「自分はどうしても、男なのだ、体が女なのだけど、これは、体が間違っているのだ」と言う人は、体を治すしかないのです。この人達の気持ちというのは、先ほど言ったように、「ある朝目覚めたら、昨日まで男だったのに、自分が女になっていたとしたら、

どういう気持ちがしますか」ということなのです。性同一性障害の人たちは、毎朝、これと逆な体験をしているのです。自分は男なのに、女の体をしている、女なのに、男の体をしている、明日起きたら、今までの夢で、女なのだから、体も女になっているはずだ、と朝目覚めてみるわけです。でも違うのです。これが性同一性障害の話です。

男と女というのはいったい何かということを書いています。今の話で、男と女というのは、実は、何で決めるのか、ということです。途中で法律的なことも、書いていますが、一番下の二行目からは、「...1987年9月29日、アメリカで男性が妊娠という記事が新聞に載りました...。」生まれたかどうかというのは、フォローしたけれど出てきませんでした。探していたら、「...1991年に男性が出産...」と出ています。この後、皆さんがご覧になったかどうかわかりませんが、アーノルド・シュワルツネッガーが出る映画で、男の人が妊娠して苦勞する、という話がありますが、あれは実話なのです。これは、今までは、女性だけだと思われていた、懐胎、出産ということが、男性にもできるようになった、ということなのです。これは、医学的には非常に簡単なことなのですが、その映画でもやっていましたが、子宮外妊娠というのは、今までは出産にまでは至りませんでした。なぜかという、まず流産しますし、生まれても超未熟児で、きちんと育てることが出来なかったからです。そして、妊娠を維持継続をすることも以前には出来ませんでした。でも、今は、ご承知のように、ちゃんと出産して、きちんと成長することが、可能になっているのです。ホルモン投与とか、そう言ったことで、流産にならないような状態を維持して、もちろん早産だけれど、産んで保育器に入れ、何とか育てられる、という程度まで、成長させることが、可能になったのです。ということは、子どもの出産に、子宮は、不可欠ではなくなったのです。だとしたら、子宮が女性にだけしかないから、男性には子どもの出産が不可能、と考えられていたのですが、男性でも、産めるようになってきたのです。手術で、受精卵を体の中に注入して、腸壁に着床させて、女性ホルモンを投与することによって、一定期間その妊娠が継続することが、医学的には可能になりました。そして、早産で生まれても、未熟児でもちゃんと保育器で育てていくことが、可能になりました。だから本当に産んだのです。私自身は産もうとは思いませんが、自分は女だと思って、性転換手術で女になったとします。名前を変えたいと言うのが、まずあります。名前を変えないと、小川熊五郎さんとか呼ばれて、スカートをはいて、「はい」とか言うと、みんなが見ますからね。戸籍も変えたい。結婚したい、というのがあると思います。最終的には、子どもを産みたいというのが、あると思います。実は、そこまで可能になりました。ということは、果たして、男と女という違いは、何なのでしょう。これは、自分が男と思っているか、女と思っているか、ということではないのかな、と思います。みんながそうなるという意味ではなくて、21世紀は、そういう方向に向かっていくのではないのでしょうか。どうしてもそうしたいという人が、そうすることが可能な時代になったのだなと思います。

結婚する人はいなくなる？

それから結婚する人がいなくなります。資料の三番目ですが、時間の関係であまり詳しくは話せませんが、25歳～29歳の未婚率が大幅に上昇しています。例えば、東京都内では、男性の75%、女性の60%が結婚していないのだそうです。すごい数です。皆さんの周りでも、30代、40代の独身の男性、特に男性が多いのですが、増えていると思います。理由はいろいろあります。例えば結婚相手となる女性の社会進出であったり、いろいろなことが指摘されています。これは、ある意味、結婚自体の制度に対する疑問符が投げかけられているわけです。将来的には、私は、結婚制度はなくなるだろうと考えています。そう遠くない将来、例えば、「うちの娘が結婚するのだ」といったら、新聞社やテレビ局がやってきて「ここ最近では珍しいですね。どうして結婚するのですか」というような時代になると思います。なぜかという、私達は、もともと結婚なんてしていなかったのです。

今の結婚というのは、対偶婚といって、男女の組み合わせが唯一の組み合わせで、死ぬまで続くと考えているのですが、それは日本の武家社会の成立、ヨーロッパ社会ではキリスト教の影響が強くなってくる中で、出てくるのです。人類の長い歴史の中で見ると、つい2～3日前の話です。結婚の制度自体が出来たのは、人類の長い歴史の中で、昨日か一昨日の話なのです。それまでは、結婚という制度は実はなかったのです。現代社会は、そういう意味でいうと、男女の組み合わせというのが、非常に緩やかになってきています。つまり、結婚以外の結びつきであっても、家族が安定して、きちんと子どもを育てられる環境であればいいわけです。結婚が唯一の選択肢ではない、ということなのです。それから、皆さんにお配りしている「老親扶養と相続問題と高齢者の問題」は、資料の一番最後のところに書いてあるのですが、最後にまとめのところで触れさせてもらおうと思います。

### 教育は家庭と地域の責任で！

家族の話を少ししましたが、教育、介護という問題を次に見ていきたいと思います。皆さんのレジュメに、非常にショッキングなことが、書いてあります。まず、この問題については、ビデオを見て頂きたいと思います。先ほどご紹介にもありましたが、広島ホームテレビで、レギュラーのコメンテーターをさせて頂いているのですが、私は子どもの問題と、家族の問題と、福祉の問題が研究テーマなのです。そこで、視聴率がいい悪いは別にして、家族の問題とか、子どもの問題とか、福祉の問題は積極的に作って頂いているのです。教育特集の番組を作りましたので、ちょっと視線をこちらに移して頂いて、ビデオを見て頂ければと思います。どういうふうに教育が変わるかということなのです。

(ビデオ「教育シリーズ ゆとりの波紋～学校週5日制がもたらすもの～」)

10回のシリーズでやりましてこれが初回の総論なのです。あと総合的学習に関する地域の関わりとかも含めてローカル局には、これだけの時間を割いて、集中的に取材をして一生懸命につくりました。見て頂いたかどうかはわかりませんが、この後、第2弾を、毎週水曜日に放送しました。5回まで続けました。第3弾は夏休み明けに、教育指導要領が変わって子ども達がどうなるのかということをもう1回検証しようと思っています。視聴率が伸びれば第4弾、第5弾もいくかもしれません。こういうのは、ぜひ取り上げていきたいと思っています。

読み書きや単純な計算のできない子が大量発生してしまうかもしれない

皆さんのレジュメを見て頂くと、「読み書きや単純な計算のできない子が大量発生してしまうかもしれない」と書きました。今のビデオをご覧頂いて、6年生までにいろいろな勉強をするわけですが、書けない漢字がたくさん出てくるというのは、ご理解頂いたと思います。他の教科についても、みんなそうなのです。ちょっと、一つずつ順番に見て頂くと、これは日本がどれだけ勉強しないかということです。2002年3月と比べて、2002年4月に指導要領が変わったら、他の国と比べて非常に勉強時間が少なくなっています。他の国より勉強しないのです。次を見て頂くと、具体的に習う量がどれだけ減ったのかということをもとめています。現在は、私たちが子どもの頃に習っていたことの1/3くらいになっています。ほんの少しだけしか習わないのです。内容のわからない子どもなんていう問題ではなくて、聞いたこともない子どもが山ほど出てくるわけです。こんなに、勉強時間が大幅に減ります。主要教科科目の勉強がこれだけ減ります。そうするとどういうことになるかということ、わかるとかわからないの問題ではなくて、聞いたこともない、というレベルになるのです。

読み書きができないとどうなるかということ、情報が情報として伝わらないのです。大学生ぐらいになってもそうなのです。現在ではどこの大学でも大学1年を対象にして、入門ゼミと称して、1年生の導入指導をやらなければならなくなりました。昔はそんなことはありませんでした。大学に入ったら、好きにやれということで、そういうことはやっていません。今は、1年生にいろいろな細かい指導をしなければなりません。そして、いろいろな、大学の規則とかシステムの利用などについて、書いてあるものを配って、読ませるのです。それが漢字が難しいから、読めないのです。時々つまるから、こちらが読み方を教えて、進んでいくわけです。何を意味しているかということ、大学生レベルになっても、本を読んだ時に、書いてあることが、頭に入らないのです。これがどのくらい進むかということ、実は、アメリカで今の日本と同じように、教育内容を大幅に削減して、個人を尊重するとか、総合的学習とかに、力を入れていた時期があります。1960年代、1970年代です。その時期に、アメリカで、17歳の人達に、大学受験をする



人達に、毎年、試験をやって、学力レベルを計るのですが、どういう結果になったかという、17歳の人約17%から20%が、準非識字者でした。文盲といって文字の読めない人がいますが、これはまったく読めないのですが、準非識字者というのは、読めるけれど、何が書いてあるのか、良くわからない、という人達が、それだけ出てくるのです。これは、非常に重大な事態です。アメリカはそういう時期があって、その時期に、日本は、高度経済成長で、非常に発展していた時期でした。日本が、高度経済成長で、発展していた時期の教育は、いわゆる詰め込み教育だったのです。その時に、日本の土地を全部売ると、値段がアメリカの土地の2倍くらいだったそうです。だから日本を半分売って、アメリカを買っておけば良かったのですよね。そうするとアメリカは日本の一部になっていたかもしれませんよ。今は、完全に逆転してしまって、日本のトップ企業は、ほとんど全部アメリカの経営者です。地元の広島にしても、そうです。どうしてそうなったかという、アメリカは教育内容を減らして個人を尊重するという教育から、かつて私達が受験戦争と呼んだ、詰め込み教育に、180度転換したのです。小学校を卒業する時、中学校を卒業する時、義務教育でも、試験に通らないと、上に進級させないという制度にまで徹底しました。それが、今の、結果です。

#### 少年犯罪と自殺率が急増する

ご承知のように、少年犯罪が多かったり、いわゆる落ちこぼれが多かったり、子ども達の問題が大変なので、ある程度は余裕を持たせなければいけない、ということが主張されます。しかし、これは逆で、私達が教育を受けた頃の子供が大きくなって、つまり私達が成長していく過程と比べてみて、犯罪発生率、自殺率、学校で起きる問題は、1970年代と1980年代に2回ほどすでに教育内容は減っているのですが、この減っていく過程で、はっきりと社会問題の増加が指摘されています。詰め込み教育を、全面的に、肯定するつもりはありませんが、詰め込み教育と呼ばれていたことが、少年非行、自殺、校内暴力を引き起こしたわけではないということは、データが、はっきり示しています。教育内容を減らして個人を尊重して、評価を、今のように、相対評価から絶対評価に変えて、という改訂を2回やりました。その2回にあわせて、ステップ・アップするように、いま言ったような問題が発生してきています。そして資料の中の説明に書いてあるように、計算のできない子どもが大量発生してしまいます。小学校で1万の桁の計算を習いません。中学校に行ったら、当然、もう教えません。そうすると、義務教育だけしか受けていない子ども達は、1万円払った時の、おつりの計算ができません。

ただ、唯一救いがあります。さきほど、総合的学習という時間が、110時間取られているといいました。この総合的な学習の大きな一つの柱は、地域と密着して、子ども達に学習に対して興味を持たせる、という動機付けのところで、あれだけ時間が割かれています。学校で、その分時間内容が減りますが、総合的学習ということで、私達地域が110時間にきちんとした形で、貢献できればと思います。私達、地域しか、いま残され

ていないのです。教育指導要領が改訂されまして、4月1日から今のような方向に進んでいます。結果が出るのは、10年、20年先です。10年、20年先に、非常にいい結果が出れば、私の取り越し苦労で、そんな事は心配する必要はなかった、ということですが、今までの実例から考えると、過去2回、今回と同じような改訂をやった結果は、必ずしもいい結果には終わっていません。今回の3回目は、大幅な改訂です。

### 21世紀の日本を滅亡から救うのは、家庭と地域の連携から

そこで、唯一救いがあるのは、総合的学習と私達地域です。少年犯罪と自殺率が急増する、少年犯罪の急増と自殺率の急増は日本で2回ほど、学習内容が減っていく中で、数字として、はっきりと、顕在化してきています。ヨーロッパでは、日本と同じような改正を10年、20年前にやりました。いずれも大きな失敗をして、かつて、私達が日本でやっていたような、詰め込み教育に、変えているのです。皆さんは、日本の子どもたちはすごく計算が良くできて、外国の子どもに比べて、数学、算数は優秀だと言いますが、それはかつての話です。昔アメリカの教育が、ゆとり、個人を尊重する、というようなことを言っていた時に、「...日本の子どもは、数の計算をして、答えを100%出す、8かける7といったら、56とすぐに答える、アメリカの子どもはできない、日本では学校で呪文を教えているのか...」と言われたのです。呪文というのは実は、九九のことです。これは対記憶といって、「さざんが九」で教えているのです。なぜ9になるのかではなく、「さざんが九」で教えているのです。そういう教育方法を、子どもたちが小さい時に、必ずやっておかなければいけないのです。これは、詰め込み教育と批判されることのひとつですが、子どもたちが小さい時でないと、出来ないのです。小学校低学年だと、「さざんが九」と言って、あっていたら<sup>マル</sup>をもらって、<sup>マル</sup>をもらっただけでうれしいわけです。そういう時にそういう知識を、はっきりと頭に詰めこんでおかないと、次に発展的にものを考えていく時の、基礎ができないのです。皆さん、年をとって、英語とかを勉強すると、なかなか頭に入らない、とよく言われますが、これは、なぜかという、小学校の時に、九九を覚えていない人が、大人になって九九を覚えようとしたら無理なのと同じなのです。大人は「さざんが九」、「しし十六」なんて言うのを一生懸命覚えるような回路になっていません。私達は成長していくと共に、なんだか、という説明が、必要になってくるのです。つまり、小さい時にやっておかなければいけないのです。成長したら、その成長の度合いによって、その教育内容は書き換えていかなければいけないのです。教育は家庭と地域の責任で、とお配りした資料に書きました。レジユメの最後のところに、「21世紀を滅亡から救うかどうか」という問いを掲げています。大幅に教育内容を改訂されましたが、方向性としていくつか素晴らしい理念が掲げられています。ただ、これが成功するかどうか、一番大きなウェートを占めているのは、実は、学校だけでなく、家庭と、私達、地域なのです。

## おわりに 明るい少子・高齢社会

21世紀の日本は、本当は明るい展望が持てると思います。地域の連携こそが、それを可能にします。  
21世紀の日本を、閑散とした寂しいリゾート・テーマパークにするか、東京ディズニーランドのような美しい夢の国にするかは、地域住民がともに手を取り合っているかどうかにかかっています。

それから「おわりに」というところで、「明るい少子・高齢社会」というふうに書きました。これについては、まず、ビデオを見てもらいますが、介護と地域の問題を扱うという事でテレビ局でつくっていただいた番組なのです。JAを対象にしているのですが、先ほど伺っていると、畑地区の「サロンはたが」とか、「福祉コミュニティづくり」とか、「生き生きサロン」というのは、この中で扱っているJAでやっている活動を置き換えて頂くとまさにぴったり来るのではないかなと思います。

### (ビデオ「げっくん LIVE 特集『介護保険スタートから2年～現状と今後を考える～』」)

#### 高齢社会ではなく長寿社会

「おわりに」で書いてある「明るい少子・高齢社会」ということ、これは何かという問題を考えてもらうために、いま、ビデオも見て頂きました。皆さんにお配りした、私の書いた新聞記事のページ、一番目のところを見て下さい。これも、本当にそうかな、と言われてしまったのですが、私の考えです。新聞記事の6枚目のところですが、「21世紀の家族は」というタイトルです。私達は本当に長生きするようになりました。2000年の新聞での私の連載ですが、平成11年の簡易生命表だと80歳以上まで生きる人の割合が、男50,6%、女73,1%です。皆さん平均寿命とか平均余命というのをご存知だと思いますが、私の母親も今年89歳ですが、私に会うといつも同じことを言うのです。「そろそろ寿命だから迎えが来る」と言うのですが、「当分お母さんのところには迎えに来ないと思うよ」と話すのです。平均寿命とか平均余命というのは、同じ年に生まれた人が、80歳になった時に半分ぐらいになるという事です。平均寿命が80歳になったという事は、半分以上は80歳以上生きるという事です。だから、90歳の人でも100歳の人でも出てくるわけです。平均寿命になったら、そろそろ迎えが来るのではなくて、自分は残り半分に入ったので、この先、何年元気でいられるかわからない、ということなのです。

80歳までに死亡する人は少数派になりました。今のところ死亡の3つの大きな原因というのは、心筋梗塞、脳血管疾患と癌です。これらが、最近の医学で、徐々に克服されてきつつあります。この3つの死亡原因が克服されるとどうなるかというと、平均寿命は、あと8年くらい増えて、90歳ぐらいが普通になるのです。90歳になったら、そろそろお迎えが来るのではなくて、90歳以上生きる人が、半数以上になって、多数派

になるという事です。医学や遺伝子工学が発達すると、将来私達ははたぶん150歳ぐらいまで生きようになるだろう、と日本のえらい先生が言っています。私はアメリカのえらい先生のほうを信じているのですが、アメリカのえらい先生は200歳ぐらいだろう、と言っています。こんな話をすると、200歳にもなって生きたくないといわれるのですが、勘違いをしてもらったら困るのは、青年期、壮年期の期間が長くなって寿命が200年になるという事です。つまり、今の30代ぐらいの元気さと若々しさが、80歳、90歳ぐらいだということです。100歳ぐらいのおじいさんが、たとえば町中で、おばあちゃんに声をかけて、「デートしないか」、「ディスコに行って踊らないか」というような時代がやってくるということです。つまり、年をとって病気になったり、寝たきりになったりして、長く生きるということではなく、青年期、壮年期を延長することによって、150歳とか200歳まで生きるという事です。それは、まあ先の話なので、皆さんもかなり頑張られれば150歳の仲間に入れるかもしれませんが、少なくとも現在は100歳の時代になっています。人生100年です。100歳まで生きることは珍しくなくなりました。

#### 少子化社会ではなくさまざまな家庭形態の出現

一方で、女性が一生の間で生む子どもの数が、平成11年で1.38。合計特殊出生率というのですが、子ども数はどんどん減って行っています。これは、実は非常に望ましいことです。先ほど「東京ディズニーランド」の話をしましたが、間もなく、待たなくても入場できるようになります。日本は人口が多すぎるのです。国の規模的な、広さから考えると、日本の人口というのは圧倒的に多すぎます。人口が減っていくというのは、現在の状況では、むしろ望ましいことなのです。ただ、人口が減っていきながら高齢者が増えていく、働く人が少なくなってくるのに、支えなければいけない高齢者の数が増えていくのが問題です。しかし、これは過渡期なのです。だからその過渡期をどうやって乗り切らなければいけないか、というのは重要な問題ですが、それさえ乗り切れれば、子どもの数が減って安定してきます。なぜかというと、女性の社会進出とか、子育てをしながら、仕事を続けるというのが難しいから、子どもを生まないのです。それは近い将来、克服されます。そうすると合計特殊出生率が、2前後で推移するようになります。そうだとすると、今のところは日本の人口が減少した状態で推移していけばこれは本当は、望ましいことなのです。そうなるまでの過程はかなり困難を伴います。

高齢社会というのは、長寿社会なので、これも望ましいことです。ただ、そういう社会になった時に、日本がどうなるかということ、私達は、長生きするようになりながら、一件の家の中で三世代、四世代、五世代が普通です。そして子どもの数が一時期少なくなりますから、兄弟がいなくなります。兄弟がいなくなればどうなるかということ、叔父さんとか、いとこが、いなくなります。親戚がなくなるのです。その当時の状況は直系でつながる家族です。そうすると、そういうふうになった時に、残されたものは何かということ、地域社会なのです。今、介護の話をビデオで見て頂きました。ポイントは

2つあります。年をとっても、自分が今まで住んでいたところで生活をしたい、そのためにどういうふうなサポートが出来るか、ということです。これは、営利をある程度考えなければいけない企業であれば、先ほどもありましたが、食事をつくったりするようなサービスは、介護保険では利益が少ないからなかなかやりません。ただ私達の地域で、みんなで生活して、ということを考えて、それが、地域でみんなで生活をしていくための、一番重要な方法なのです。JAはその地域で農業をする人達で作った団体なので、その地域のことを考えてやっているわけです。これは、先ほどの式典の冒頭でもありましたが、畑賀でのいろいろな活動であったり、福祉コミュニティーづくりということに置き換えて頂くと同じだと思います。元気高齢者という言葉も出てきます。介護保険が成功するかどうか、一番大きな鍵を握っているのは、要介護になった時に、どれだけ支援してくれるかということでは無く、介護の必要のないお年寄りを、どれだけたくさんつくるか、ということです。70歳になっても、80歳になっても、90歳になっても、自分で自分のことができるくらい元気でいてもらう、そういった元気なお年寄りをつくるような社会、元気高齢者の運動です。先ほどうかがっていましたら、この畑賀地区では、そういった方向での取組みがなされているような印象を受けました。

時間になりましたが、資料の中に、私達がやっている活動の参考資料をつけさせて頂きました。もちろん地元で、それまで生活していた環境の中で、ずーっと生活していければいいのですが、残念ながら、どうしても施設介護の必要な人達がいらっしやいます。現在、広島で1万数千人が施設入所の順番待ちなのだそうです。もちろん施設は非常に熱心にやっておられます。ただ、施設がいいと思っていることと、利用者とか利用者の家族、地域の人がいいと思っていることが、100%一致しているわけではありません。そこで私達は、「高齢者福祉施設の第三者評価」というのをやってみようと思いました。「21世紀高齢者福祉を考える会」というのを立ち上げました。これは日本で初めての試みです。まったくのボランティアで、どこからも財政的な支援を受けないで、利用者、家族、地域の視点で施設の点検をしてみようということです。点検して、ここがいいとか悪いとか、言うつもりはまったくありません。利用している人、その家族、地域の人にはこういうことを求めているのだよ、ということ施設にわかってもらうのが、一番重要なポイントです。そして、そういうふうな方向での改善をすることによって、施設も地域も、よりよい形で運営出来るようになれば、一番いいのではないのかなと思っています。しかし、非常に大きな障害があります。なかなか外部の人に、そういうふうな、チェックをされるという事は、好ましく思われません。もし皆さんでお時間があれば、来週の火曜日と水曜日の「げっきんライブ」の時間で、高齢者福祉施設の第三者評価についての特集番組を、2日間にわたって作り、放送することにしていきますのでご覧下さい。本当に苦労しています。そして、どういうことが必要かというのは、ご覧になって頂ければ、少しはわかって頂けるのではないのかな、と思っています。

最後に宣伝になって申し訳ございませんでした。頂いたテーマを全部話しかれたとは思えませんが、皆さんが「21世紀の社会を私達・地域」で、どう取組めるか、家族、教育、介護を考えていく一つの参考にでもなればありがたいなと思います。いろいろご批判もあると思いますが、あとで懇親会の場もあると思いますので、いろいろ皆様のご意見もお聞かせ頂ければありがたいと思います。時間が超過しましたけれど、以上で私の準備をした話は終了にさせて頂きたいと思います。ありがとうございました。



### 小川先生のプロフィール

広島大学政経学部卒、広島大学大学院博士課程を経て、現在、広島経済大学助教授。専門は家族法の比較法的研究。1991年には、オーストラリア政府の研究助成を受け、オーストラリア家族法の調査研究を行う。その後、西オーストラリア州立大学ロースクールの客員教授として、比較法（日本法およびアジア法）の講義を現在まで担当している。

国際的な法律家の団体である「アジア・太平洋法律協会（家族法部会）（事務局：オーストラリア、ダーウィン）会長代行。「国際、家族裁判所および調停裁判所協会（事務局：アメリカ合衆国、ウィスコンシン州マディソン）理事。「世界会議『家族法と子どもの人権』」幹事。オーストラリア法曹協会会員。

「家庭裁判所・調停裁判所雑誌」編集委員（発行：ホフストラ大学・ロースクール、アメリカ合衆国ニューヨーク）